

くも《2010年8月例会報告》

【日 時】2010年8月19日（木）19:00～21:10（その後「ルン」～最後は1:00過ぎ）

【会 場】筑波大学附属高校 3F 会議室（東京都文京区大塚 1-9-1）

【テーマ】Jリーグ・アカデミー活動の評価

【演 者】山下則之（元Jリーグアカデミー・プロジェクトリーダー）

【参加者（会員）20名】★赤尾修（アミティエ・スポーツクラブ） 阿部博一（日本サッカー史研究会） ★安部久貴（東京学芸大学大学院） 牛木素吉郎（ビバ！サッカー研究会） 小澤一郎（サッカージャーナリスト） 岸卓巨（DUOリーグ事務局） 北原由（青梅FC／都立武蔵野北高校） 国島栄市（ビバ！サッカー研究会） 小池正通（杉並アヤックス） 幸野健一（三幸企画） 清水諭（筑波大学） 関谷綾子（関谷法律事務所） 高田敏志（町田高ヶ坂SCコーチ） 高橋義雄（筑波大学） 高原渉（宝塚ジュニアFC） 田村修一（フットボールアナリスト） 中塚義実（筑波大学附属高校） 藤田直樹（ビバ！サッカー研究会） 藤田文武（㈱ストリートスマート） 山下則之（元Jリーグアカデミー・プロジェクトリーダー）

【参加者（未会員）3名】※佐藤創（中央大学学友会サッカー部） ※佐藤芽衣（㈱日本旅行） ※中津川雄也（中央大学）

【報告書作成者】岸卓巨

注1）★は2010年度会員名簿完成後の新会員（名簿には掲載されていない）。※は初回参加者なので参加費無料。

注2）参加者は所属や肩書を離れた個人の責任でこの会に参加しています。括弧内の肩書きはあくまでもコミュニケーションを促進するため便宜的に書き記したものであり、参加者の立場を規定するものではありません。

Jリーグ・アカデミー活動の評価

山下則之（元Jリーグアカデミー・プロジェクトリーダー）

<目 次>

第Ⅰ部. プレゼンテーション

1. 選手育成プロジェクトと
Jリーグアカデミーの概要
2. 各クラブの評価
3. Jリーグ・アカデミーの活動内容
4. Jリーグアカデミーとして考える育成課題
5. 海外のビッグクラブにおける育成環境

第Ⅱ部. ディスカッション

1. Jリーグ新人選手の供給源に関して
2. Jリーグアカデミーの目的
3. Jリーグクラブにおける育成活動
4. JリーグアカデミーとJFAアカデミー
5. 指導者の採用と査定について
6. 外国人指導者について
7. アカデミーとしての指導体系について
8. アルゼンチンユースに関して
9. 育成環境に関する今後の見通し
10. おわりに

山下 こんにちは。山下と申します。今日は育成というテーマで話をさせていただきますが、私がここでお話しさせていただくことは、既に皆さんご存知のことでもあるかと思います。グランパスで普及と育成に携わらせていただいた他、2000年にJリーグが次の10年をどうしていこうかというNEXT10というプロジェクトを立ち上げた中で、私は選手育成プロジェクトに関わらせていただき、その流れのままJリーグアカデミー・プロジェクトリーダーを8年程やらせていただきました。

今年の3月にJリーグを退職し、今は名古屋で地域のいろいろな方とボランティア活動をさせていただいております。昨年の8月頃から、子どもたちや保護者がヨーロッパのスポーツ文化に触れる機会をできるだけ作れないかということで、ドイツの知り合いと(社)独日スポーツアカデミーを立ち上げました。多くの子どもたちや保護者の方が、サッカーだけでなくスポーツ全般に関わっていけるお手伝いができるかということを考えていますが、今はどんな活動を進めていくかということを探求中です。ドイツだけではなく、他の国とも連携を取っていますが、今後そういうところで皆さまとご縁がありましたらお声をかけていただければと思います。よろしく願いいたします。

【第I部 プレゼンテーション】

1. 選手育成プロジェクトとJリーグアカデミーの概要

今日私がお話しさせていただくのは、NEXT10の選手育成プロジェクトとJリーグアカデミーがどのような活動をしてきたのか。そして、その後にUEFAなどでは2002年頃からクラブライセンス制度を設けて実際に各クラブの評価をしているわけですが、Jリーグアカデミーでも、実際に各クラブがどの程度の活動ができるようになったのか、調査項目を決めて全クラブを巡回しながら確認した結果の一部分を見ていただき、今後の進め方についての議論をしていただければと思います。

まずは8年前から話していきます。選手育成プロジェクトは2001年から始まっていました。この資料をまとめたのが2002年の1月です。Jリーグがスタートして日本のサッカーが発展し、ワールドカップが開催され、日本サッカーは飛躍的に発展しました。そのような環境の中で、子どもたちの将来の育成について再度見直すために、Jリーグの理念を基本にJリーグ・アカデミーが設立されました。

Jリーグ規約の一部です。J1に参加するには登録種別1～4種のチームを持っていること（ただし、第4種については、その年代に対するサッカースクール、クリニック等の活動を行っている事で足る）となっています。ここで今までの小中高という切れ目をなくし、1種・2種・3種…、年代がピラミッドでつながっていくということ当然目指しました。

この当時、育成年代における日本サッカーの課題として、次のようなことがありました。各世代における連携が不十分。リーグ戦というものがほとんどない。特に若い年代層の子どもたちを指導できる指導者や施設が十分ではない。

Jリーグ設立

<Jリーグ理念>

- 日本サッカーの水準向上及びサッカーの普及促進
- 豊かなスポーツ文化の振興及び国民の心身の健全な発達への寄与
- 国際社会における交流及び親善への貢献

Jリーグ規約

第19条<J1 資格要件>（一部要約）

- JFA登録種別の1種、2種、3種および4種に属するチームを有していること
- トップチームおよびサテライトチームの双方を編成できること

今では人工芝や天然芝のピッチが全国にできましたが、この当時は本当に施設が足りませんでした。資金的にも不足していました。

こういったサッカーの課題を克服するために、Jリーグアカデミーが立ち上げられました。

その時の海外の動向ですが、もう既にドイツやフランス、イングランド等では、子どもたちにサッカーを普及していく活動を始めていました。我々もアカデミーを立ち上げるのにあたって、ドイツやイングランドのアカデミーを参考にしました。幼児期から育てていこうという機運がヨーロッパでは高まり、具体的に活動が進められていました。さらに、サッカーだけではなく人間教育を重視した活動が実際に行われていました。このような海外の動向も参考にして、Jリーグアカデミーが設立され、まず日本サッカーの発展のために世界レベルのプレーヤーが次々と育つ環境を構築する日本型の育成システムを考えることになりました。

育成システムの狙いですが、プロになる選手というのは一握りで、プロになれない人の方が多くことから、サッカーだけのエリートではなくて、「人生の成功」と書いていますがサッカー以外のこともいろいろな意味で体得してもらおうということを考えていました。仕組みは、Jリーグ事務局内に、Jリーグ・アカデミーというプロジェクトを立ち上げて、アドバイザースタッフとして中塚先生など各分野の専門的知識を持った方にも数名加わっていただいて、アカデミーをどのように動かしていけばいいかアドバイスをいただきながら進めました。

活動の重点としては、まずは一貫指導体制の充実ということがあります。5歳～12歳までの一貫指導。それから育成年代の指導者の充実、トレーニング環境の改善・充実、メディカル体制の充実といった一貫指導体制を、小中高という考え方ではなくて年代で一貫してつないでいく。それから、地域とのネットワークづくり。クラブとして地域との関係を築いていく。それから子どもたちの人間性や社会性を育む環境づくり。それから育成に関する調査・研究。タレント発掘のための調査・研究、トレーニングプログラムの研究など、海外からの情報を取り入れながら日本型にするにはどうしたらいいかということを考えました。それから、育成情報のデータベース化。

全体の概念図ですが、このような形になればということで地域とともにJクラブが互いに協力しながら子どもたちがどんどん育っていく形になればと考えています。

スタートするにあたって、その当時20弱あるJクラブの中でこういったクラブを対象にやっというかということで、アカデミーに参加する資格基準というものを決めて日頃活動ができているクラブとできていないクラブを分けながら、できているクラブを選び出していきました。それらをモデルク

育成システムの狙い

単なるサッカーのエリート教育ではなく、本システムによって、子供達が多彩な能力を身につけ、将来、どのような世界においても「人生の成功」を得られるよう、その礎となる環境を整える。

< On the Pitch >	< Off the Pitch >
技術力	・自立心
体力	・コミュニケーション力
判断力	・国際感覚
精神力	・経済感覚
創造力	
チームワーク	

活動の重点

- ① 一貫指導体制の充実
 - 5才～21才までの一貫指導
 - 育成年代の指導者の充実
 - トレーニング環境の改善・充実
 - メディカル体制の充実
- ② 地域とのネットワークづくり
 - サッカー協会、地域の指導者、学校、親・保護者との関係づくり
- ③ 子供達の人間性や社会性を育む環境づくり
- ④ 育成に関する調査・研究
 - タレント発掘のための調査・研究
 - トレーニングプログラムの研究
- ⑤ 育成情報のデータベース化

クラブとして7クラブを選んで、この7つのクラブで今お伝えしました活動を進めてきました。

進め方としましては、このように年代別に順番に見直していきます。実際には、18歳までの子どもたちの育成組織は存在するため、それはそれでクラブ方針を進めながら、Jリーグ・アカデミーとしては段階を踏んで進めました。いま2010年ですから、やっと幼児期から進めたものがJrユースの年代まで進んできた形です。世界の100年の歴史の流れの中で考えるとこのようなことを何回繰り返していかねばならないのかわかりませんが、まず第1段階としてここまで積み重ねてきました。

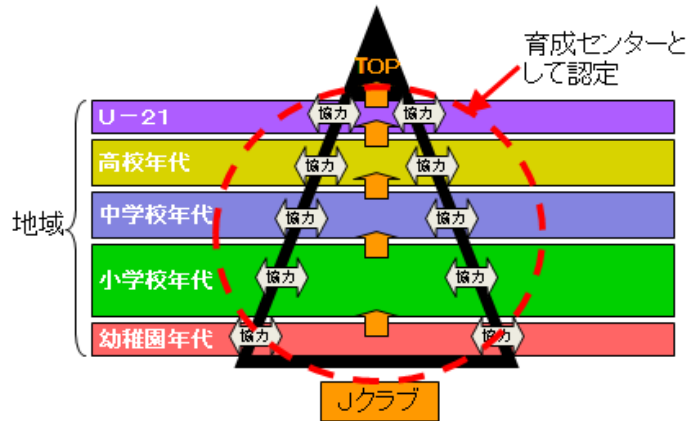
今までこんな形で、選手育成プロジェクトからJリーグ・アカデミーを立ち上げて8年間実際にやってきたものを振り返ってみますと、スタート時の7クラブと、徐々にJ1、J2のクラブ数が増えてくる中で、活動の歴史の差によっていろいろな規模の違い、育成の質にバラツキができています。実際にJリーグ・アカデミーという名前はあっても、基準で定めたアカデミーとしての活動ができていないクラブから、今からスタートしようというクラブまで、非常に大きなバラツキが出ています。それが、今後Jリーグ・アカデミーの活動を進めるにあたって大きな課題になってきました。

2. 各クラブの評価

山下 各クラブのバラツキを直していくために、Jリーグ・アカデミーの評価基準を基に、各クラブの現状を調査し評価しました。評価基準項目がたくさんあってコピーできませんが、育成の方針、普及育成活動、スタッフとコーチ、メディカル体制、練習の施設、地域との関係、こういったところを細かく項目別に5段階に分けて調査しました。クラブ側がまず自己評価をし、それをJリーグ・アカデミーの事務局が巡回し、確認しながらお互いに評価点を出し、全クラブを評価A、評価B、評価Cの3つのグループに分け、今後活動していく中で、どういったサポートをするのか、あるいはサポートしなくても独自で活動していけるクラブなのか、を明確にしていきました。

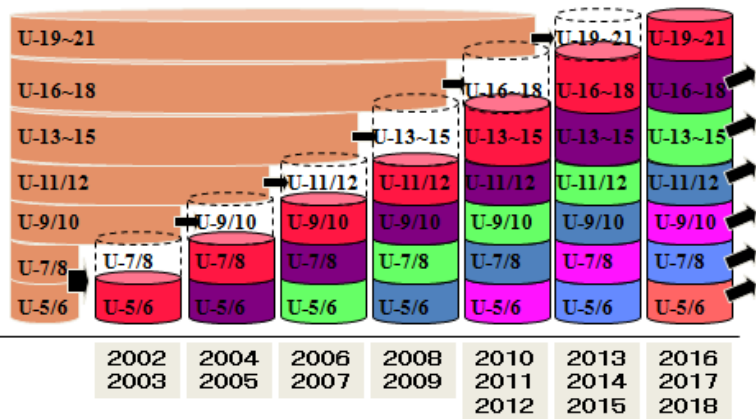
- 評価A：世界に挑戦していける基盤が整備されてきたクラブ、
- 評価B：アカデミー活動で飛躍的に基盤整備が進んできているクラブ
- 評価C：まだまだ準備が不足しているクラブ

「クラブ選手育成の概念図

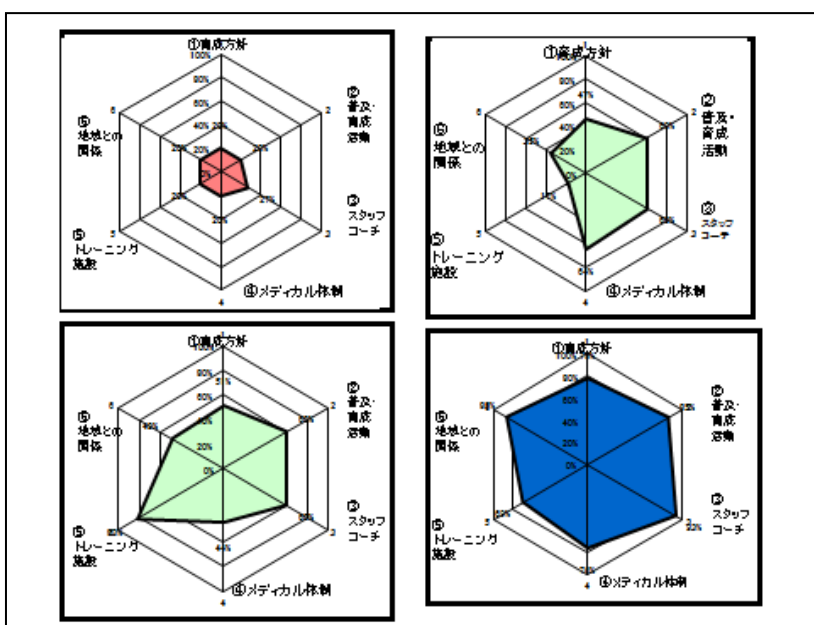
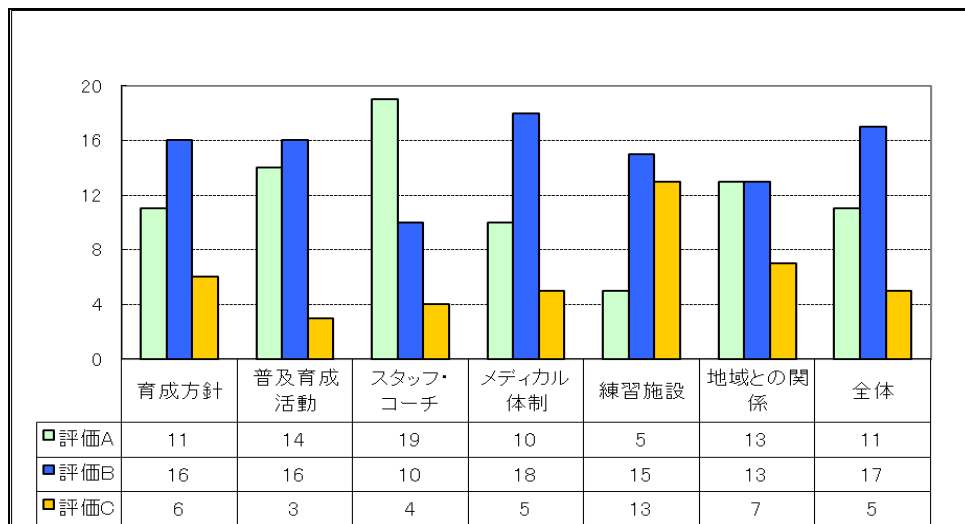


進め方

※基本的には5〜6才から積み上げていくが、それ以上の年代に対しても、可能な限り平行して取り組む。



その当時は33のクラブがあり、全クラブを調査した結果、右図の評価C、評価B、評価Aという結果が出てきました。評価Aにはアカデミー当初にモデルクラブになっていたクラブが入っています。評価Cには、まだまだアカデミー活動よりも自分のクラブのトップチームを運営していくことで精一杯というクラブもあります。



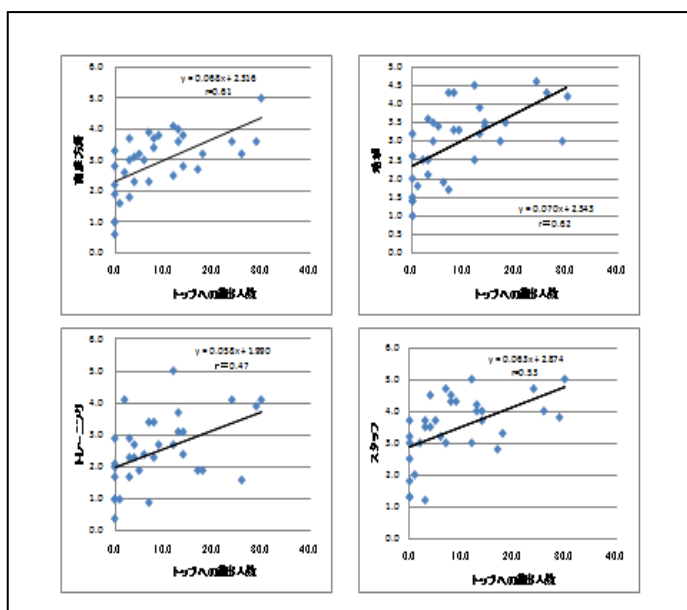
分類別に見てみます。育成方針がしっかりと整備されていないクラブ、練習施設の足りないクラブが多いことが調査でわかりました。スタッフ、コーチは一応整備されてきています。育成方針と施設整備がまだまだ不十分であることがわかりました。

評価基準をレーダーチャートにしたサンプルですが、このような4つくらいのパターンに分かれました（左図）。左上はスタートしたばかりで、アカデミーというか選手育成の準備がまだまだできていないクラブ。右上のパターンは、

ある程度準備はしてきているが施設が足りない。左下のパターンでは、施設は一応揃ってきたが、育成の方針、スタッフ・コーチが揃っていない。右下のクラブだと、それなりの活動ができるクラブ。もう少し完成されたクラブもありますが、だいたいこれが上位のクラブです。

これは2009年の調査結果で、その後、各クラブは育成方針の見直しや施設確保に努力しているので改善されていると思いますが、私自身が今年（2010年）の3月でJリーグを退職しているので、その先のところは確認がとれていません。

次に、育成の組織からプロ選手を輩出している人数とそれぞれの活動項目の相関を見てみると、育成方針（右図左上）および地域とのコミュニケーション（右上）がしっかりしているクラブはプロ選手の輩出もそれなりに



成果を上げています。また、上記のような強い相関はありませんが、トレーニング施設（左下）が整備されているクラブ、スタッフの充実（右下）は、プロ選手の輩出に相関があることが確認できました（危険率1%水準）

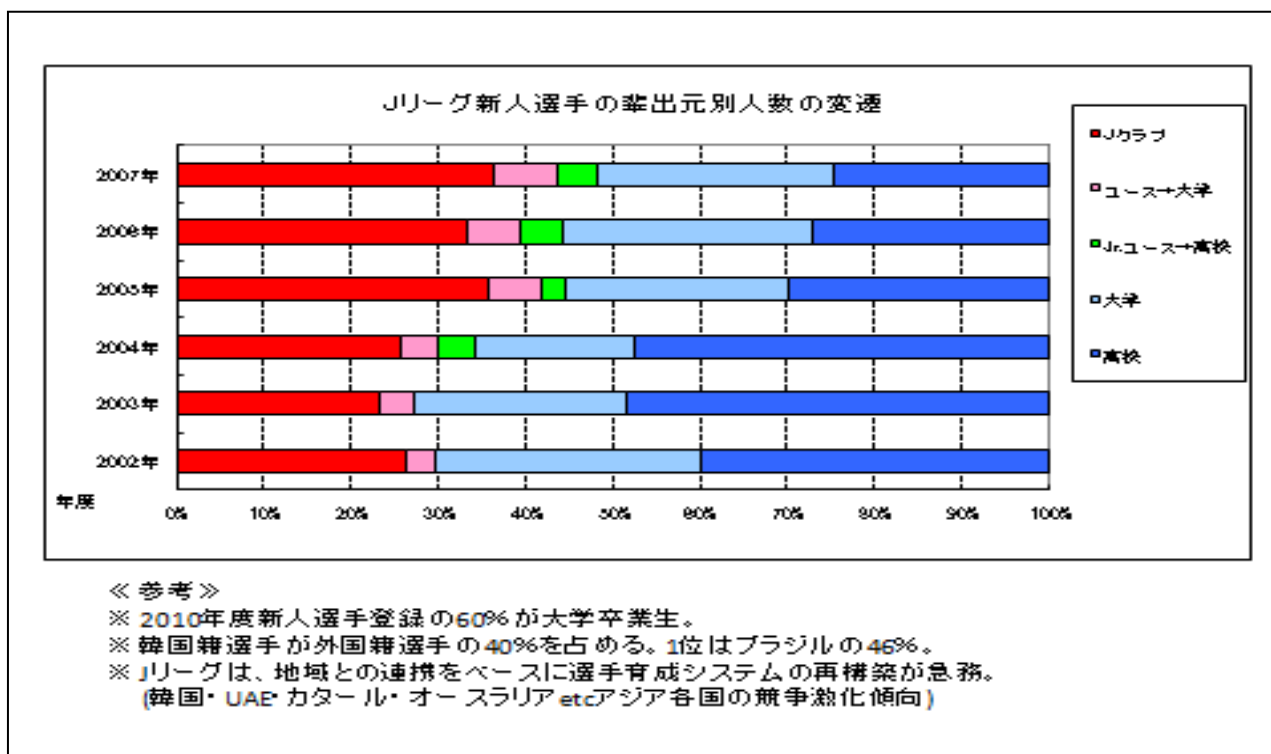
次に、Jリーグ・アカデミーが2002年にスタートして、2007年度までのデータですが、赤のJクラブ下部組織からトップに上がっていく選手は徐々に増えてきています（下図）。ユースから大学、ジュニアユースから高校と比較すると、下部組織からトップに上がる選手は多くなってきたという気がします。

2010年度登録の新人選手の約60%は大学卒業選手です。その中には、ユースから大学に行った選手、ジュニアユースから高校・大学に行った選手がありますが、やはり即戦力ということから考えると、大学卒業選手が多くなっていることが、Jリーグの新人選手獲得の特徴になっています。その理由は、高学歴を望む保護者、大学リーグの充実、大学のトレーニング環境（コーチ、施設）の改善等が考えられます。

それから、トップ選手の中には韓国籍の選手が非常に多くなってきています。ブラジルの約46%に次いで韓国は約40%で2番目に多い。アジア枠ができた影響もあって、韓国の選手たちが非常に増えてきたことが、ユースから直接トップ昇格が難しくなった原因の一つかと思います。

それからもう1つ気になっているのが、地域との連携を通した選手育成システムの構築が必要になってきているのではないかということです。

Jリーグ・アカデミーを立ち上げ、今日までをいろいろな角度から評価し、実際現状を見てみると、Jクラブで育った選手がユースからトップに上がらなくなっていることを最近感じているところです。



3. Jリーグ・アカデミーの活動内容

山下 実際にはアカデミーがどんな活動をしてきたのかちょっと見ていただけますか（映像上映）。これは2008年度にドバイでスポーツ・カンファレンスがあった時に作成した資料です。UAEも、Jリーグ・アカデミーに、かなり興味を持っていました。地域との関わりを持ちながら普及活動を、サッ

カーだけでなく、スポーツ全般でやっていこうというのに興味を示す国が多かったと記憶しています。

若い子どもたちに生活習慣病の増加や遊び時間の減少などが起きている今の環境の中で、Jリーグアカデミーとしては、子どもたちとどのような付き合いをしていったらいいかということを考えてきました。そのために、育成に関する調査・研究、育成情報のデータベース化を始め、それに関連してJリーグアカデミーに通って来ている子どもたちの体力測定を実施したり、保護者の方たちと栄養についてのセミナーを行ったり、子どもたちとクラブハウスで勉強したりもしてきました。それから地域との連携については保育園・幼稚園での巡回教室、小学校でのサッカー教室、各種スポーツキャラバン活動、こういったことを各クラブが中心にやっています。

これは筑波大学の先生にお世話になりながら開発してもらったクッションですが、子どもたちは喜んで使っています。いろいろな遊びを各地で行って来ました。子どもたちが夏休みに、サッカーだけでなく、いろいろな遊びを通して人間性や社会性を育めるように、Jリーグだけでなく地域のキャンプ協会、地域の施設を貸していただける自治体の方々と一緒に活動してきています。

先ほどカップ戦が多いという課題を言いましたが、中学2～3年生がレギュラー、1年生は球拾いということではなくて、みんなゲームを通してサッカーを学べるようにリーグ戦をきちんと整備する必要があるということで、2007年度より13歳リーグを立ち上げました。これは、Jリーグだけでなく、地域の参加希望の街クラブや学校も含めて実施してきました。いま全国で、170～180チームがこの13歳リーグで活動していると思います。

それと、子どもたちの国際交流。指導者養成。こういったこともやっています。これはJリーグ選抜でブラジルに行った時の写真ですが、中東・オランダ・ドイツなどJリーグの選抜として各国へ出かける機会を増やしてきました。今は各クラブで海外遠征を行い、子どもたちを自立させようとする試みも進んできています。指導者養成では、Jリーグの外国人監督を講師に講習会をしたり、海外での指導者研修等もやってきました。

こんなことを我々Jリーグは、JFAとも連携しながら進めてきています。

4. Jリーグアカデミーとして考える育成課題

山下 このように、約8年間、いろいろな活動を進めてきました。その中で、多くの課題が出てきています。Jクラブの選手育成の課題として、先ほど育成方針というところでお話ししたと思いますが、やはり長期的視野に立った育成ビジョンを構築していくことがまだまだできていないクラブがあります。クラブが子どもたちを育てる上で、何を大切にしていかななくてはいけないのかを、どこまで理解しているのか。選手の成長を長い目で見守る。「勝つ」より「育てる」という部分をどのように考えていくかを大事にしていく必要があると思っています。Jクラブの場合は、Jクラブ関係者全員の理解と協力を得る。経営が難しくなっていくと、まず下部組織に影響が出ます。みんなが意識を統一させ、社会に送り出すということを共有することが大切になります。

Jリーグアカデミーとしては、育成の責任者で各クラブの経営に参画している人が非常に少ない。オランダサッカー協会では、クラブライセンスの基準の各項目に1～5の評価を設けていますが、その中に、クラブの経営に育成の責任者が参画しているかという評価項目を設けています。クラブ関係者全員の理解と協力を得るためには、やはり育成責任者がクラブの中できちんと報告し、予算を組み、活動を進めていけるようにしていかなければいけません。

あとは、人材の確保とその教育の質を高めていくことが今後の課題となります。技術に卓越した選手を育成する。ジュニアユース年代までは勝ち負けや戦術に偏りすぎずに、技術を身につけていくということ。2010年の南アフリカワールドカップもそうですし、2008年のユーロもそうでしたが、世界のサッカーやお客さんは、技術のある選手を求めています。技術というものをJクラブがどこまで教えることができるか、クラブ全体がどこまで我慢していけるかだと思います。

あと、Jクラブには全体で900人くらいのフルタイムのコーチがいるわけですが、コーチの質を上

げるための活動をしっかりとしていかなければいけません。コーチを評価するためのゲームが、日本には根付いていません。単発的なトーナメントでなく、長期的なリーグ戦を進めていく中で、選手を育てているかどうかが見えてきます。育成の責任者として、コーチを選ぶことの大切さと育てる大切さ。教育者としてのコーチというものをもう一度考えていかなければいけないと思っています。

長期リーグ戦の構築は今後さらに充実させていかなければいけないと思っています。施設・環境の整備向上と育成のための予算の確保などができる育成の責任者がクラブ経営の中に参画していないと、長期リーグの構築はなかなかできません。子どもたちにとって、地域にとって、リーグがないのはよくない状況です。

また、選手の発掘という部分も必要になってきます。選手をどのように見極めていくのか、良い選手とはどういう選手なのか、その選手をどうやって育成していくのか。選手発掘の重要性について、クラブの方針を明確にしていく必要があると思います。

子どもたちのゲームでは、やはり良いサッカーをさせて成長を促していく。選手の成長を長い目で見ていくことが必要です。そのために、長期的なリーグで、子どもたちやコーチの評価・育成をやっていく必要があると思っています。クラブの一人ひとりが夢を持ち続けることも大事です。そして、指導者の再教育として、調べる・考える、まとめて発表する、報告するということが、クラブの中で一人ひとりのコーチができるように育て上げていく必要があると思います。

JFA の課題としては少しずつ地方分権にもっていかないと、今の中央集権のやり方では、特徴のある選手が出てこないのではないかなと思います。個の育成という点からいくと、地方分権というのは大事じゃないかなと思います。

アジアに目を向けると、韓国・UAE 等、日本を追い越すために、若年層から選手育成と指導者養成に力を入れています（undercategory の選手に特徴ある選手が目につきます）。このままでは、アジアの中でも勝つことが厳しくなるのではないかと感じます。

以上、今までのアカデミーとその活動を振り返って、課題も含めて報告させていただきました。これに関して、いろいろなご意見をいただければと思っています。

5. 海外のビッグクラブにおける育成環境

山下 お手元に配らせていただいた資料は、Jクラブの施設がまだまだ十分ではないという中で、では海外のビッグクラブがどのような状況になっているのかを示したものです。僕が実際に見たわけではなくて、それぞれの育成部長の話を聞いてまとめたものです。サバを読んでいる部分もあるかもしれませんが、ピッチ数はこのくらいあるのではないかなと思います。クラブハウスも、シャワールームだとか、勉強する部屋だとか、そういうものを持っています。どの程度のコーチがいるかについては、例えばフェイエノールトについて、5月に育成部長と話をしたのですが、12名中7名が元オランダ代表選手とのことでした。それからこの間、元オランダ代表のキャプテンが引退しましたが、彼はフェイエノールトのジュニアユースのコーチになると言っていました。それぞれのポジションにスペシャリストを置いて、子どもたちに教えるというよりも、お互いにやってみせるという活動ができてきているようです。それから、精神科医とかソーシャルワーカーを置いているクラブがかなり多いです。ハートの部分でだめになってプロになれなかった人は結構多いですが、アルゼンチンの元U-20監督のウーゴ・トカリ氏の話では、3～4年かけても精神的な部分は直すと言っていました。それなりに技術があって、フィジカル的にも世界に通用しそうな選手を、メンタル的な弱さで潰したりはしない。徹底してサポートしていくという話をしていました。それから、学校との連携ということを重要視しています。自分のクラブで学校を持っているところもたくさんありますが、やはり子どもたちの教育という部分を大切にしています。

先日11年目を迎えた TOYOTAU-16国際ユースで、やっとアルゼンチンの代表を呼ぶことができ、その代表のオスカル・ガレ監督と話をする機会がありました。彼は、1986年のメキシコ・ワールドカ

ップで優勝した時のメンバーです。彼といろいろな話をして、優勝した瞬間の気持ちはどうだったかを聞いてみると、「優勝した瞬間は、子どものころからプロになるまでいろいろなコーチやお母さん、お父さんにお世話になってきたことが一気に頭の中に浮かんだ」という話をしてくれました。また、「その瞬間あの太陽をこの手で掴んでいる熱い思いをした」。そういう人たちがアルゼンチンのコーチになって、情熱を持って子どもたちを教えているのかなと思うと、日本人の子どもたちとはサッカーIQも違うのかなと思います。いろいろと資料に書きました。間違っている部分もあるかもしれませんが、大筋では間違っていないと思います。

それから、アルゼンチン U-20監督のウーゴ・トカリ氏に聞いた話をまとめたものを配布しています。彼の話聞いてすごいなと思ったのは、U-20のワールドカップで5回優勝するのと同時に、フェアプレー賞を5回獲得しているということです。

最後に、長期リーグ戦がもたらすものとして僕なりに思ったものを書きました。その中で1番僕が思うのは、リーグ戦は、勝っている時はもちろん監督として気分は良いけれど、負けこんでいる時に自分が何を考えて子どもたちとどのように戦っていくのかを考えることもリーグ戦の良さなのではないかということです。カップ戦も大事ですが、やはりリーグ戦とカップ戦をバランスよくやっていくのが、子どもを育てるコーチとしてもやりやすいと思っています。

長いお話しになりましたが、ご質問がありましたらお伺いしたいと思います。

中塚 ありがとうございます。Jリーグアカデミーに丸8年にいらっしゃって、その立ち上げから関わって来られた理念と活動の中身、その成果の一部をご紹介いただきました。あわせて、海外の育成環境の情報なども交えていただきました。

【第2部 ディスカッション】

1. Jリーグ新人選手の供給源に関して

中塚 それでは、最初にアカデミーに限定してご質問やご意見をいただければと思います。先ほどの、Jリーグ新人選手の供給源を表したグラフ（Jリーグ新人選手の輩出元別人数の変遷）をもう1度出していただけますか。Jクラブの下部組織出身者が、思ったより伸びてきていないということですかね。さらに言うと、このグラフからは見えてこないかもしれないけど、本当は街クラブでやっていたけれどJクラブに引き抜かれた子も、この中に入っているわけですよね。この事態をどのように評価していったらいいんでしょうか。

山下 ジュニアユースからJクラブに来る選手や、ユースからJクラブに来る選手もいます。

中塚 いま見させていただいたJリーグアカデミーのプログラムは、Jクラブがこれまで取り組んできたプログラムであって、そのプログラムに沿って育てられた子はまだJリーグのトップに出てきているわけではないということですか。

山下 そうですね。それはまだまだ何年間か繰り返していかなければいけないということもありますし、逆にユースから大学に行く選手が増えてきたというのも確かです。トップに上がってもなかなか試合に出られないという選手も多くなってきています。

高橋 確認ですが、水色と青が少しもJに関わったことがない人ですよね。このグラフ全体を見ると、Jリーグの関係に全く触れない人は年々減って来ている気がするんですが。

山下 赤から緑までが何らかの形でJリーグの下部組織に関わっていた選手です。最終的にはJクラブからプロに上がったわけではないけれども、高校から戻ってきたり、大学から戻ってきたりということが多くなってきています。

高橋 Jに触れる人が増えてきたという意味ではJクラブがやっている育成に何らかの形で触れるようになったということですかね。Jリーグがユースからトップまで人数を絞らずにそのままいけば、実はトップに上がる選手は増えているかもしれませんね。上に行けば行くほどJリーグ側が絞っていることも影響しているのではないのでしょうか。

山下 そうですね。当初はクラブの方針もあって、せっかくだから上に上げていこうということで人数を絞らない時期も何年かあったのですが、結局その選手のためにならないし、将来的にその選手が社会に出て生活していく中では、プロになることが全てではないので、力のある選手だけ上げるということにしています。ジュニアユースから高校サッカーを目指す選手はそれでいいし、大学からもう1度戻ってくればいい。かなり幅が持てるようになってきたという気がしています。

藤田 人数を絞ってきたということについてですが、このグラフにはパーセンテージは書いてありますが、総数はどうなっているんですか。

山下 今だいたいシーズン終了の時に契約をしないという選手と新しく入ってくる選手の人数はほぼ毎年同じくらいで、110~120人くらいです。

藤田 このグラフ全体で120人くらいということですか。

山下 あと海外からの移籍などもありますので、外国籍の選手が今120~130人いますから、新人の選手として新人研修の人数を見ると100~120人くらいの幅で推移しています。

2. Jリーグアカデミーの目的

牛木 基本的なことを聞きたいのですが、Jリーグアカデミーの目的というのはJリーグクラブのトップの選手を育成することなんですか。

山下 Jリーグのクラブでプロとして活躍できる選手を育成していこうというのが最終的な目的です。

牛木 それはJリーグのクラブの中でということですね。

山下 そうですね。そこに行きつくまでには地域とのコミュニケーションやいろいろなスポーツを経験させるということがありますが、最終的にはプロ選手にならないとプロクラブの経営は成り立ちませんので、そういう人たちを育てるということが1番の目的です。

牛木 それがJリーグアカデミーの目的ですね。育成センターもそうですね。

山下 そうですね。その中に普及活動もあれば、育成活動もあり、いろいろ地域とのコミュニケーションを取りながらということを考えています。

牛木 例えばヨーロッパのバルセロナなどは、自分たちのクラブの選手を育てる。プロチームを持っているクラブが自分のところで活躍する選手を育てるために育成組織を持つというのは不思議ではないですが、疑問に思うのは、Ｊリーグ全体で統一的にやる必要があるのか、ということです。各クラブがやればいいんじゃないかと思うのですが、そここのところはいかがでしょうか。

山下 いま言われた通り、各クラブが責任を持って選手育成を地域とともにやるという方向に少しずつ変わって来ています。立ち上げ当初は、どこかがモデル的にやってみないと、何をしたらいいかわからないということもありました。そういう中で普及活動や育成活動、地域との連携などいろいろなことをやってきたのですが、じゃあそれがプロ選手を育てるのにいいのか、全クラブが同じことをやっているのはいいことなのかということが出てきて、ここ２年ぐらいで少しずつ見直していることです。クラブがクラブ色を出していこうというように、少しずつ変わって来ています。

中塚 以前、Ｊリーグアカデミーのアドバイザースタッフをさせていただいていた立場から一言。Ｊリーグが始まった当初は、Ｊのクラブとして２種・３種・４種を持つことという枠組みの中で、例えばアントラーズのユニフォームを着ている高校生チーム、中学生チーム、小学生チームをつくってＪクラブの資格を持つ。ここまでは９３年の時点でできていました。枠組みとしてはできていたけれど、実際に将来プロになる、あるいは日本を代表して世界で戦っていくようなプレーヤーをどうやって育てていけばいいのかという方法論になった時に、各クラブがノウハウを持っていなかったのではないかと思います。持っているところと持っていないところの差がすごくあり、そこをすり合わせようとしたのが、Ｊリーグアカデミーだったのではないかなと、僕は認識しています。それと、地域ごとに事情が全然違って、都会で人口が多くて簡単に行き来できる場所と田舎で交通手段が限られているところ、あるいは少年サッカーがものすごく進んでいて後から入ってきたＪリーグが煙たがられるところなどいろいろあったと思うんですね。ですから、地域ごとの特色を活かしながら、お互い情報交換しながら、いいものを共有していこうというのがそもそものスタートだったと感じています。

山下 アカデミーを立ち上げた頃はＪクラブが１２くらいしかないもので、子どもの育成に関して経験と歴史のある街クラブと、プロリーグを立ち上げたばかりのＪクラブとでは溝がすごくありました。その溝を埋めて行くことがすごく大変でした。まずは、地域とどのようにコミュニケーションを取っていくか、そここのところからスタートしました。積み上げ方式ということで、幼児期から順番に取り組んでいこう、いきなりジュニアユース・ユースでプロ選手を育てるところに行くのではなく、最初は、子どもたちと保護者と地域の方々と、どのようにコミュニケーションを取ればいいのかという話し合いを、会議でしていることが結構多かったです。その頃は、プロ選手を育てることは考えたってできないというか、ヨーロッパや南米のように１００年以上の歴史の中で、育成を何回も何回も繰り返し、積み上げてきた国じゃないですから。プロ野球の選手やコーチは子どもたちに教えてはいけないという時代でしたから、サッカーはそれができるということを教育委員会の方たちに説明して歩くことも難しかったですね。なんでサッカーはプロがアマチュアに関わるのか、というように取られました。

中塚 育成センターと、次に育成センターになろうとするＪクラブの人たちが集まって報告会があり、私も何度か参加しました。Ｊリーグアカデミーは低年齢から順に積み上げて行く方式でやっていこうとしたと思うのですが、一方でＪクラブの人は、プロ選手の育成ということを最初は望んでいたと思うんです。プロ選手の育成なのに、何でキッズなの？　そこで紹介されるプログラムが幼稚園の巡回指導だったり、先ほどのふわふわマットを使ったスキルのドリルの紹介だったり。こんなのでプロ選手が育つのか？　というような疑問も、Ｊクラブ側から出ていたように思います。そういう意味では、長い育成をやるための取っかかりの部分をやっていることについての共通理解を得るのに結構時間がかかったのではないかなという気がします。

山下 いま中塚先生がおっしゃったように、クラブが既にユースやジュニアユースの組織を持っている場合、その育成をやった方がもっとプロ選手が早く育つのではないかという意見がでていました。でも、日本のサッカーを考えたところから始めても、それまでができていない子どもたちに何をやるのかというのが大きな課題で、地域と一緒にスポーツの楽しさを教えるところから、ジュニアユース、さらにユースへと繋げていこうと考えました。

最近の傾向から振り返ると、経営難から育成組織をどんどん減らしていくクラブが多い中で、幼児期から順番にやってきたクラブは徐々に収入が増えてきている。スポンサーもついている。青少年の育成に対するスポンサー、通ってくる子どもたちの会費などで、ここで活動するコーチの人件費が賄えるようになってきています。一つひとつ積み重ねてきたことが良かったというクラブが増えてきています。

3. Jリーグクラブにおける育成活動

高田 Jリーグアカデミーで育ってきたというのはJクラブの巡回指導などの活動で育ってきたと認識していいですか。例えば、U-12ですと4種に登録しているチームがありますよね。ヴェルディの場合、U-12のチームの他、スクールをやっています。それも含めて、アカデミー本部長のような人がクラブにいて活動されているんですか。あと、巡回指導など全部含めてアカデミーの活動という認識でよろしいですか。

山下 徐々にプロ選手を育成するという方向に各クラブ切り替えて行く中で、この下のスクール活動などはクラブ組織の中の事業部がここを受け持つようになってきました。選手を育成するということはトップの下の強化部についてくる。アカデミーとしてこれまで活動してきたことを2つに分けるクラブが多くなってきました。

高田 それは、特にどうしろということをおっしゃらずに、クラブに任せているのですか。

山下 そうです。クラブの地域性や方針に基づいて、自分たちのクラブはどっちに行けばいいかというのをここ2～3年考えています。普及活動も含めてやるというクラブもまだまだありますが、最終的にはプロ選手を育てることが大きな目的なので、そちらに向いて行くかと思います。しかし、それはクラブが考えることです。

高田 アカデミーではU-5～6は、強化というよりもサッカーを楽しませるということですよ。そこからU-12の育成に行く選手というのはすごく少ないように感じます。結局は、他のクラブからセレクションで入って来ている子で、誰1人プロのコーチが教えたスクールから上がってきた子どもはいない。東京などではそういうのが多いですが、それはもう仕方がないのでしょうか。幼児のチームはコーチの食いぶちをつなぐだけではないかというような雰囲気が出ているような部分もあると思います。実際、スクールの活動現場ではコーチがものすごく一生懸命やっているんですが、結果的にそのチームで練習しても上に上がれず、上にいるのは街クラブから入ってきた子たちという現状については、アカデミーとしてどのように考えていますか。

山下 先ほどのような活動をしてきたかという話の中で体力測定について話しましたが、あれは8年前から各クラブで続けてきています。延べにして1,800人くらいやったところで、全部見直してみたら約10数名しか継続して測定を受けている選手はいないんです。結局、外から入ったり、出たりしているんです。生え抜きが出てくるのが良いとか悪いとかではなくて、地域ぐるみで考える必要

があると、私は思っています。13～14歳の年代は、生活の中で食事や睡眠の問題、勉強のことなどいろいろなことがあり、全ての子どもたちがJクラブと関わることはできません。であるならば、Jクラブが地域に出かけて、地域でできるサポートをお互いに連携をとってやっていながら、Jクラブにいる選手が入れ替わって来ても、それは構わないのではないかと思っています。それは、日頃地域と付き合う中での自然な形ではないかと思っています。ヨーロッパでもずっと同じクラブで育ってきてプロになったという人はそうたくさんはいないと聞いています。

高田 私もドイツやイタリアに行ってそういう認識があるので、下から育てようとするにすごくこだわる意味があまりよくわかりません。競争原理を持ってきて、ジュニアユース年代から上だけをビシッとやるというのも1つの方法かと思います。

山下 僕が思っていることは、生え抜きだけで行くのではなく、地域とコミュニケーションを取りながらどんどん入れ替わり、子どもたちを受け入れる受け皿づくりが、Jクラブの役割としてすごく大切だということです。JクラブにいるAという選手が何歳かで別のクラブに行っても、何歳かになってまた戻ってくるという出入りができる街のクラブがたくさんあることが大切だと思っています。その子どもにとって、Jクラブで経験したことが人生の中でプラスになってくれればそれでいいし、またそこで育った選手が戻ってくるのはすごく良いことじゃないかと思います。そのためにはそれぞれのクラブに受け皿をきちっとしてくださいというのが、Jリーグアカデミーの1番重要な課題だと思っています。Jクラブが子どもたちを抱えるよりも、たくさん子どもたちと関わっていくことができる体制づくりが必要じゃないかと思っています。言葉としては“受け皿づくり”で簡単に終わっているのですが、これからも考えていかなければいけないことだと思っています。

中塚 その話は以前もよくしていたと思うんですが、Jクラブというビッグクラブの周りにミドルクラブがあって、その周りにスモールクラブがあって、そこからどんどん自分にあつたところでプレーができるような環境づくりということですよ。その結果、先ほどのお話しのように、Jのジュニアユースから高校のチームに行く子とか、Jのユースから大学に入り、そこからJリーグに入ってくる子とかが出てきます。その場合は、高校や大学が、Jクラブの周りにある受け皿の1つとして機能しているわけだから、それは良いことなんだろうと思うんですよ。

山下 我々Jリーグアカデミーの1つの仕事としては、街のクラブの人にはなかなか集めにくい世界の情報や、Jリーグでやってきたことを街の人に報告することがあると思います。報告会も、かなり多くやっているんですが、そういう情報をお互いに共有していく仕事というのが、各クラブで多くなってきています。

牛木 それはそれで良いと思うんですが、今の話は先ほどの高田さんの話の本筋から外れていると思います。Jクラブの他に地域にいろいろなクラブがあって、そこからうまい子がだんだん出てきて選抜されていくというのは、有り得るべき形だと思うんです。先ほどの質問のように、5～6歳の年代、8～11歳の年代とJリーグの育成センターの中で縦に繋がっているような形だと、5～6歳の、将来トップに上がれるであろう子どもを抱え込むということになるわけですね。抱え込むと言ってもそんなにたくさんいるわけじゃないから、少数しか抱え込んでいない。そうすると、昔の東欧型英才教育の形になるわけですが、そのシステムは、ソ連では体操とか飛び込みとかでは成功したけれども、サッカーでは成功しなかったわけですね。将来伸びるだろうと思った子どもも必ずしも伸びない。サッカーはいろいろなところでやっていて、たとえばマラドーナは子どもの頃、他の子どもとやっていると自分が1番うまいから得意になってますますうまくなった。そういうこともあるので、水泳や体操で英才教育をやるように5～6歳から抱え込んでやるのがいいかどうかということは、これまで長い

こと言われてきた1つの大きな問題です。それと、このJリーグアカデミーとは矛盾しているのではないかと思うのですがどうなのでしょう。

山下 ここに書いてある絵の描き方がそういう風に捉えられたと思うのですが、実際は10~20人を抱え込んでいくというイメージではなくて、地域とどのようなことをやっていけばいいのか、それぞれの年代において何をしたらいいのかを議論しながら進めて行くということです。

牛木 そうするとどのあたりで抱え込むんですか。

山下 今Jリーグで下部組織を持つというルールの中にU-12まではチームを持たなくていいということにしています。チームを持ちなさいというのはU-15とU-18だけなんです。U-12まではチームを持たなくてもいい。地域と一緒にやってくださいと言っています。チームを持つ持たないは、クラブの方針で判断せよということです。

牛木 若年層を抱え込むのは、いま現実にヨーロッパで起こっていることですよね。日本もそういうふうにしようかと思っているのかと思ひ質問しました。

山下 UEFAの会議の中でも、クラブの中でプロを目指すことを言いすぎてサッカーが嫌になる子が多くなってきているということを聞きました。あるクラブでは、月曜日のオフの時は、お母さんたちが子どもたちを集めて、そのクラブの施設を借りてゲームを楽しませているそうです。U-12くらいまでは、サッカーだけでなくスポーツを好きになる活動をJリーグアカデミーではずっと目指してきています。U-12までは育成組織を事業系の部署で抱えていて、U-15から強化系の部署に移るクラブが増えてきています。

4. JリーグアカデミーとJFAアカデミー

田村 遅れてきて申し訳ありません。もしかしたらもう話されていることかもしれないのですが、いまお話しされていた普及活動は、地域でやっておられるわけですよね。アカデミーではそこから上の選手はセレクションをして取るということですよね。そのつながりはどのようになっているのでしょうか。

山下 クラブの中で育成活動全体をアカデミーとして抱えていて、U-12くらいではチームを持つわけではなく、地域の指導者とともにやっていき、U-15からチームを持つクラブもあれば…。

田村 そうではなくて、福島のアカデミーの話を伺いたいです。今はJリーグクラブのお話をされていたんですか。

山下 福島のアカデミーはJFAの話で、これはJリーグクラブの話です。

田村 そういうことですか。

小澤 せっかくなので、JFAアカデミーとJリーグアカデミーがどのように棲み分けしているのかということを知りたいのですが。

山下 JFAアカデミーは、1つの独自のモデルとして福島で立ち上げて行っていますが、Jリーグの

クラブがある地域からもテストを受けて行っている選手がいますよね。福島のアカデミーはJリーグの1つの育成組織だと我々は思っています。福岡にできたものも同様に考えています。

小澤 2つが独立したもののようなので、棲み分けがきちんできてきているのか、情報共有がきちんできてきているのかというのが前から見ていて疑問なのですが、その辺はどうなのでしょう。

山下 Jクラブの指導者が福島に勉強しに行ったりはしています。Jリーグアカデミーとしても、コーチ何人かであそこで勉強会を行ったりはしています。

小澤 Jリーグアカデミーの組織規模とか予算規模についてお話しできる範囲で教えてください。

山下 先日会議があったのですが、J2のあるクラブでは、全体の予算も少ない中で、子どもたちのトレーニングにどのように力を入れて行くかということになると予算的にもものすごく厳しくて、スタッフの人数が足りない。給料をどのくらいもらっているかはわかりませんが、これだけの子どもたちがいたらこれくらいのスタッフが必要と考えている数よりもかなり少ない。ゴールキーパーコーチはいませんか、2つのカテゴリーを1人で見ていますとか。そういうレベルのところから、1つのカテゴリーに2人ずつコーチがいて、フィジカルコーチがいてというクラブまであります。

小澤 質問の仕方が悪かったようですが、Jリーグアカデミーとしての組織の規模だとか年間予算を質問させてもらったのですが。

山下 Jリーグアカデミーは海外に遠征をしたり、指導者研修をやったりという予算は持っているのですが、そのほかは、それぞれのクラブの予算でやっています。Jリーグアカデミーは、各クラブの経理を管理しているわけではないので、各クラブがやっていることに対して指示は出せません。

牛木 アカデミーという言葉が同じだから、同じような組織だと誤解されやすいんだけど、JFAのアカデミーは名前の通り1つの学校のような組織だけど、Jリーグアカデミーは平たく言えば連絡組織みたいなものですよ。学校として機能しているのは、それぞれの育成センターとか、各クラブということですよ。

小澤 つまり、Jリーグの中にJリーグアカデミーという組織があるわけではないんですね。

牛木 アカデミーという名前がまるで1つの学校のようなからそういう認識をしてしまいますよね。

北原 Jリーグ技術委員会ってありますよね。あれは、クラブユース技術委員会と重なるんですか。

中塚 何人か人は重なってますが、別組織ですね。

北原 国体の準備をする時にクラブユースからも人を出していただくようお願いすると、全国の技術委員が7人しかいないとか言われます。私たちが高体連という組織で行く時には20人くらいいますから、誰が来るかで揉めるのですが、クラブユースでは誰も出せない状況で揉めるようです。

注) U-16国体では JFA、高体連、クラブユース連盟がコラボレーションしたテクニカル・スタディ・グループ (TSG) を立ち上げて大会分析を行っている。今年の千葉国体では JFA 6名、高体連 4名、クラブユース連盟 2名に地域 FA が加わり TSG の活動を行った。

山下 Jリーグの技術委員会はJリーグだけで8人くらいです。

北原 その人たちはだいたいクラブユース連盟と重なっていますか。

山下 そうですね。クラブユース、それからJFAの技術委員会と掛け持ちでやっています。

5. 指導者の採用と査定について

赤尾 2つお聞きしたいことがあります。私はクラブを統括する立場にあるのですが、育成に関して最も大事なことは、良い指導者を養成することと考えています。私が統括しているアミティエ・スポーツクラブでは、フルタイムの指導者が100名いて、毎年20名ずつ新卒で採用しています。そこで、Jリーグアカデミーのクラブでは、育成指導者をどういったところを見て採用しているのかということと、その後の査定はどのように行っているのかを教えてください。査定の部分で言いますと、私のクラブはU-12以下なので、例えば全国大会で優勝したとか、トレセンに何人送り出したとかで評価しているところもあると聞くのですが、育成年代ではそういうところで評価するところが難しい部分もあると思うのですが、そのあたりはどのようにお考えでしょうか。

山下 私はJリーグの中で仕事をしていたので各クラブのことはわからないのですが、名古屋で育成と普及をやっていた頃のコーチの採用は、サッカーマガジンに募集案内を出させていただき、全国区で募集していました。年に60人くらいの方に応募いただいて、その中から2人くらいを採用するのですが、技術的なことやサッカーの知識について評価項目を決めてあります。それと、今は、少しずつJリーグを辞めた人が増えてきているので、そこからあげていくという2つの方法で行っています。査定については、育成の責任者がトレーニングの内容から年間計画まできっちり作ってあって、その中でコーチとしてクラブの方針に合った活動ができているかを、1週間に最低1度は確認していました。コーチにも自己評価をしてもらい、僕も評価して、それを照らし合わせてどこがどうだったか話していました。ただし、全国大会で勝った負けたは、評価基準に入っていない。

赤尾 大会や試合の結果ではなく、日々のトレーニングを見ているということですか。選手がどう育っているかよりも、コーチがどう取り組んでいるかということを重視されているということですか。

山下 それプラス、選手がどう育ったかということですね。

赤尾 それはゲームも練習も両方見てということですか。

山下 カップ戦で勝った負けたというのは、運もあるし、たまたま去年受け持ったコーチの子どもたちを引き継いで勝ったとかいろいろなことがあります。参考データにはなるかもしれませんが重視していません。この年代までに何がどうなっていればいいかというプランがあって、子どもたちがそれをクリアしているかということで評価しています。クラブの中に育成方針がないとコーチの評価はできません。名古屋では、育成方針に基づいて10年間のプランをすべてつくりました。17歳で完成にして、コーチと話をしながら、海外の情報を取り入れながら、プランをつくりました。僕がいた頃は、12~18歳のカテゴリーごとに、最低1回はコーチが海外に連れて行くようにしていました。

赤尾 先ほど6項目で各クラブを評価されていた表があったかと思うのですが、あれは後から振り返ったときに、ある程度実績とマッチした査定になっていますか。逆に査定が低いところから能力の高い選手が出ているとか、査定は高いけれども良い選手は出なかったという mismatch はありますか。

山下 2008年度から、優秀育成クラブ表彰という制度ができました。そこではじめに選ばれたのがガンバ大阪です。ガンバ大阪は、それなりに活動して、ACL でもユース出身者が半分くらい活躍していました。他に選手が育ってきていると思うのは、サンフレッチェ広島。世界で通用するかはわかりませんが、数としてはかなりの選手が出てきています。それから浦和も、最近タレントを発掘する目と育成のシステムが上がって来ていると感じています。子どもには学校もあり、家庭もあり、学習の問題、食事の問題などさまざまな問題が関わってくるので、そこがどのように整備されているかが重要になってくると思っています。

6. 外国人指導者について

中塚 育成の話は尽きませんが、残り時間も限られています。せっかく海外の情報もありますので、海外の育成事情を取り上げてから「ルン」に移動したいと思います。取っ掛かりとして、私が個人的にお聞きしたいと思っていたことがあります。山下さんがグランパスの育成・普及事業を豊田市ではなく三好町で展開されていた頃、「サッカータレントの発掘方法に関する研究」のインタビューでお邪魔したことがあります。その頃は、グランパスで選手生活を終えたジョルニーニョが育成コーチで回っていたと思います。ブラジル人ですね。「ブラジル人の育成コーチもいいんだけど感覚に頼り過ぎるところがある。いろいろ見てきた中でルーマニアが良いんだ」という話をされて、グランパスの育成・普及部ではルーマニアの育成コーチを採用しました。なぜルーマニアに目をつけられたのか。そしてどのあたりが日本に合っていると感じられたのかについてお聞かせください。

山下 TOYOTA の生産方式の中にある PLAN→DO→CHECK→ACTION が、ルーマニアではきちんと整理され、それがきちりと伝わっているということがありました。ルーマニア自体、経済的な問題もあって崩れてきてしまったようなのですが、僕が育成を行っている時にはルーマニア人スタッフを3人呼んで、それだけではなくオランダ人など、多い時には7人の外国人スタッフがいました。ルーマニア人がいいのか、そのコーチ自身がいいのかわかりませんが、わかりやすく説明してくれて理解しやすかったというのがあります。彼はその後、シンガポールに行ってカタールに行って、カタールではクラブの指導者もやっていたのですが、今はオリンピック代表のコーチをしています。サッカーそのものをわかりやすく解説してくれました。

高橋 私が関わった印象だと、スポーツ科学的な視点を持った方でした。

山下 一緒に来たゴールキーパーコーチも、科学的にプランを作れるコーチでした。ドイツ人よりはわかりやすいと思います。

7. アカデミーとしての指導体系について

参加者 アカデミーとして、技術体系とかどこでどういう技術を教えるかというのはあまり決まっていないんですか。

山下 各クラブが持っている育成プランが異なるので、そこは私もやっていきかけたことなのですが、なかなかそこを理解してもらうのは難しかったです。

参加者 コアとなる統括的な技術指導体系があるというよりは、各クラブに全てまかせているということですか。

山下 僕もそのような体系を作りたくて、はじめの7クラブの育成責任者とは相談してきたのですが、そこまでやるとなると各クラブで状況が異なるので難しかったです。ただ、育成はこういうことを積み重ねて行くんですよということは理解してくれていると思います。

8. アルゼンチンユースに関して

阿部 一人のサッカーファンとして興味があるのですが、これだけ優勝してきたアルゼンチンユースが、去年のワールドユースで予選敗退でしたね。その辺の話はある程度今回聞けたのでしょうか。

山下 聞けませんでした。

阿部 日本も予選で負けましたが、アルゼンチンが負けるのは何かあったのかなと思ひまして…。

山下 監督が変わったというのはありますね。長年やってきたウーゴ・トカリ監督がプロクラブに引き抜かれて、育成担当者が変わったということがあるのかもしれませんが。アルゼンチンの各カテゴリー代表を決めるシステムは変わらずにやっているのですが、タレント発掘の目は変わったかもしれません。でも、今回来た U-16の子どもたちは、ファーストタッチとかゴールに向かう姿勢とか、これまでの代表と変わっていませんでしたね。

9. 育成環境に関する今後の見通し

高田 資料にある長期リーグ戦についてなのですが、今のリーグ戦整備の状況はうまくいっているとお感じですか。U-13はある程度リーグ戦が行われるようになりましたが、U-12までは全くと言っていいほど整備されていないと私は思っています。私がいる町田でも、リーグ戦を年間通してやるようにしていこうということで、ある学年はやっているのですが、結局はよくわからないカップ戦や市協会のカップ戦があるため、毎週末試合を行い、年間を通してどのように戦っていくかを考えるリーグ戦の良さを、指導者も選手もほとんどわからない状態だと思います。その中で、全日本少年サッカーという、何千チームも出て、何チームしか勝ち上がれないという大会が盛り上がっている。この前も、暑い時間にテレビ中継のために試合を行っている。2年前、指導者講習会の後に試合があって、講習会では37℃以上では試合を行っていけないと言っているのに、38℃を越えても、テレビ中継があるために試合を中止しないでやっている。結局、現場の事情というものがあるかと思うのですが、そのあたりを変える動きがどこかであるのでしょうか。例えば全国大会を冬に持っていくとか。アカデミーが管轄しているわけではないと思うのですが、育成・普及という面でその年代に関わってくるという点で、何かメスを入れる動きはありますでしょうか。

山下 僕が日本サッカー協会の中でいろいろ聞いている限りでは、2012年には U-12のリーグ戦をスタートさせるようです。8人制で行うということ、犬飼会長時代に話していました。ただ、4種の地域の委員長が今まで活動されている中で、簡単にはいかないという話も聞いています。これから進んでいくとは思いますが、8人制にするとゴールはないし、地域によって考え方が違うと思うので、どうするんだろうとも思います。全日本少年サッカーについては、あれはあれで歴史を持ってやってきているので評価しなくちゃいけないだろうし、どうやっていけばいいかを、いま詰めている段階だと思います。

幸野 僕の中では、Jリーグの技術委員と JFA の技術委員が分かれてある必要があるのかという思

いがあるって、そこら辺は一緒にやる動きがあるのでしょうか。

山下 私も3月で外れているので、その後具体的には聞いていないですし。ここで僕が話しているのかわからないので…。

幸野 まあ、一緒になりますよね。僕は前からの方がいいと思っていたので、同じようなことをやっているのにバラバラできたことが問題だと思いますので、良い傾向であると思います。

山下 互いに2～3人ずつ入ってやっていたので…。

幸野 同じビルにあるわけですから。

10. おわりに

中塚 そろそろ時間になりました。育成の話は尽きないですし、最後に幸野さんが指摘されたように、皆さんモヤモヤしながら、JリーグとJFAの関係はどうなってるの、という疑問がいろいろなところから出てきたと感じます。改めてトピックとして取り上げられればと思います。

最後に山下さんに一言いただいて終わりにしたいと思います。

山下 たくさんの方たちに僕の話をお聞きいただきありがとうございました。日本のサッカーがもうひと皮向けないと、ベスト10を本当に目指せるのかというところにすごい不安があります。世界はどんどん進んでいるので、日本が今のペースで追いかけていても追いつけないという状況です。この中にも世界のサッカーをご存知の方はたくさんいらっしゃるかと思いますが、そういうことをどんどん発信していかないといけないと思います。正しい情報をタイムリーに発信できるグループが必要かなという気がします。そして、子どもたちにどうしたらいいかを具体的に考えていく必要があるかと思っています。僕自身はドイツでNPOの組織のライセンスを取れたので、独日スポーツアカデミーというのをスタートさせたのですが、会長と話しているのは、独日だけでなく、インターナショナル・アカデミーにしようということです。いろいろな人たちといろいろな交流を持ちながら、どんどん日本に情報を持ちこんで、子どもたち、保護者、みんながスポーツを理解できるような体制を作りたいと思っています。

また機会がありましたらいろいろ教えてください。今日は本当にありがとうございました。

以上